

日本糖尿病学会 序文

小児・思春期に糖尿病を発症して病気とともに生きる人たちは、長い期間にわたってライフステージ毎に異なる治療の目標や方法の設定が必要です。ことに小児・思春期の糖尿病治療においては、合併症の抑制のみならず、健全な心と体の発達を支援することも大切で、この時期の糖尿病のケアには特別な知識と技術に裏づけられた全人的対応が欠かせません。このような観点から、日本糖尿病学会と日本小児内分泌学会は2001年から『小児・思春期糖尿病管理の手びき』を3版にわたり出版し、2015年には糖尿病を持つ人たちの自立を支援するという立場をより明確にして『小児・思春期糖尿病コンセンサス・ガイドライン』として新たに刊行してきました。

以降、現在までの間に糖尿病の病態や発症機構に関する新たな知見の集積、臨床研究によるエビデンスの蓄積、インスリン製剤や他の注射製剤・経口薬など様々な治療薬の開発と普及、持続血糖モニター（CGM）やインスリン自動投与制御システム（AID）などの先進機器による血糖コントロールの革新など、多くの進展がありました。そこで、今回両学会の合同委員会の先生方により多くの改訂をほどこした『小児・思春期糖尿病コンセンサス・ガイドライン 2024』が刊行されることは、糖尿病とともに生きる方々とそのご家族、またそのケアにあたる医療従事者にとって大きな福音になるものと思います。今回の改訂においては、長谷川奉延理事長をはじめとする日本小児内分泌学会の先生方、また日本糖尿病学会の先生方に心より御礼申し上げます。

このコンセンサス・ガイドラインが広く活用され、小児・思春期の糖尿病を持つ方々の糖尿病のマネジメントと健やかな成長に貢献することを願っております。

2024年4月

一般社団法人 日本糖尿病学会
理事長 植木 浩二郎

日本小児内分泌学会 序文

このたび『小児・思春期糖尿病コンセンサス・ガイドライン 2024』が刊行されました。「小児・思春期糖尿病コンセンサス・ガイドライン」を2015年に刊行して9年経ち、新しいエビデンスも蓄積され、小児・思春期糖尿病を持つ人たちの自立を支援する立場を堅持しつつ改訂されました。

改めていうまでもないことですが、小児・思春期糖尿病を持つ人たちは生涯にわたって長期の療養生活を送ります。保育園・幼稚園、学校、進学あるいは受験、就職、結婚、妊娠・出産、子育て、さらに壮年期、老年期といったライフステージに応じた、かつその国独自の文化や社会環境も念頭に入れた支援が望まれます。そこで、日本糖尿病学会 小児糖尿病委員会と日本小児内分泌学会 糖代謝委員会が合同でコンセンサス・ガイドラインを作成しました。「ISPAD (International Society for Pediatric and Adolescent Diabetes : 国際小児思春期糖尿病学会) Clinical Practice Consensus Guidelines 2018」, 「ISPAD Clinical Practice Consensus Guidelines 2022」に準拠し、日本糖尿病学会編・著「糖尿病診療ガイドライン」も参考にし、わが国の小児・思春期糖尿病により即しています。

『小児・思春期糖尿病コンセンサス・ガイドライン 2024』の内容は包括的です。すなわち、単なる診療ガイドラインにはとどまりません。総論(定義と分類、診断基準、疫学など)、1型糖尿病、2型糖尿病、その他の糖尿病、患児・家族の支援、移植再生医療、ケアのシステム化、という項目立てです。ガイドラインの策定においては Evidence-Based Medicine の手法を取り入れ、推奨グレードを問う CQ, および推奨グレードを付さない Q 形式を各項目の冒頭に示し、偏りが入らないように工夫されています。

本書は小児・思春期糖尿病の診療やケアにかかわる医師、看護師、心理療法士、薬剤師、臨床検査技師などのメディカルスタッフの日常診療に必ず役立つと確信しています。いわゆる教科書として総論から読み進める、はじめから知りたい CQ あるいは Q のページを開いて最新の知識やケアを整理する、診療チーム全員で輪読するなど、それぞれのご希望、お立場に合わせてご活用いただけると思います。また広く学校や社会への啓発にもご利用いただき、小児・思春期糖尿病を持つ人たちのスティグマの軽減、解消に役立てていただくことも期待しております。

最後になりますが、ご多忙のなか改訂にご尽力いただいた植木浩二郎理事長をはじめとする日本糖尿病学会の先生方、ならびに日本小児内分泌学会の先生方に、日本小児内分泌学会を代表し、感謝いたします。ありがとうございました。

2024 年 4 月

一般社団法人 日本小児内分泌学会
理事長 長谷川 奉延